

「湯」はスープの意 煎じないのが「散」

Q 漢方薬には葛根湯（かつこんとう）の「湯」や香蘇散（こうそさん）の「散」のようによく出てくる語尾がありますが、違いを教えてください。

八味地黄丸（はちみじおうがん）などのように「丸」という剤型もある。これは「散」をはちみつなどで丸い錠剤にしたものである。

「湯」は大病を一気に掃蕩（そうとう）させるという意味で体の内部の悪いものを「洗い流す」剤型、「散」は急病を退散させる頓服（とんぷく）薬、「丸」は慢性疾患を徐々になおす徐放剤、というのが元来の意味分けである。

A もともと「湯」とはスープの意味であり、日本風に言えばみそ汁のようなものである。スープやみそ汁は絶妙の組み合わせによって独自の風味や味わいが出るように、「湯」は煎（せん）じることによってブレンドの妙を引き出す。

しかし煎じると重要な薬効を持つ香りの成分などが消失する場合がある。「薬研（やげん）」というすり鉢で粉にし、生薬を煎じることなく、そのままパウダーにした剤型が「散」である。

最近エキス製剤が普及している。これはインスタントコーヒーを作るような手法で「湯」の剤型をドライフリーズ加工して乳糖のようなもので細粒（さいりゅう）や顆粒（かりゅう）にし、煎じる手間や保管の便を図ったものである。漢方専門以外のほとんどの一般病院で処方されるのはこのエキス製剤である。